西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程

――益冨又左衛門組の運上に関する史料紹介――

Formation Process of the Huge Whaling Organization in the Saikai Whaling Industry Area
:Historical Materials Introduction about Business Tax of the Masutomi Matazaemon Group

末田　智樹
SUETA Tomoki

一、はじめに

本稿の目的は、神奈川大学日本常民文化研究所（独立行政法人水産研究センター中央水産研究所図書資料館）に所蔵されている『漁業制度資料　筆写稿本』（以下、筆写稿本）所収の（当時長崎県北松浦郡生月町壱部）益冨治保家文書（以下、益冨家文書）に含まれる三点の史料紹介である(1)。

筆者は、プロジェクト型共同研究において、長崎県の近世・近代期における捕鯨業史関係の史資料の調査および収集を進めてきた。その中核的な作業が、筆写稿本所収の益冨家文書の確認であった。益冨又左衛門家を鯨組主とした益冨組は、肥前国平戸藩生月島を本拠地とし、西海捕鯨業地域において活動した巨大鯨組であった。筆写稿本における益冨家文書は、長崎県の捕鯨業史関係のなかで近世期の私家文書として圧倒的な分量を誇る。このことから当時、益冨家文書が近世日本捕鯨業史の関連史料のなかでも最重要史料の一つと認識されていた(2)。

今回は、『益冨家文書年代順目録』の一～二頁に記載されている史料名のうち、筆写稿本所収の三点を益冨家文書の原史料と照らし合わせて翻刻する(3)。この目録では、№一五二（一連番号）「宝暦十二　年〻御運上油納帳」（書冊・年代順目録番号№一二）、№八一（一連番号）「宝暦十三未四月　午冬瀬戸組指引帳　益冨又左衛門」（書冊・年代順目録番号№一三）、№一五九（一連番号）「安永四、六月　午冬〆未春迄瀬戸御崎大嶋組運上先納指引帳　御勝手方　益冨又左衛門殿」（書冊・年代順目録番号№二八）となっている(4)。

これらの史料には、宝暦期（一七五一～一七六三）と安永期（一七七二～一七八〇）において、益冨組より平戸藩に上納した膨大な運上油・運上銀が子細に記されている。益冨組の運上銀については、松下志朗による平戸藩の財政構造と結びつけた実証的な研究がある(5)。この論考は、明和期（一七六四～一七七一）以降における益冨組の運上銀の分析を主としていた。

益冨組は享保十（一七二五）年に創業し、元文・寛延期（一七三六～一七五〇）頃から鯨組経営の軌道に乗り始めた(6)。その後、益冨組は近世後期の西海捕鯨業地域において最大規模の経営組織を擁する鯨組にまで成長し、万延元（一八六〇）年まで存続した(7)。本稿の三点は、益冨組が運上を通じて藩権力と上手く結合しながら、巨大鯨組に至った形成過程を知る一連の貴重な史料である(8)。

翻刻凡例

1. 筆写稿本中の旧字体等は原則として常用漢字に改めた。〻、〆、〆、而、冨については原字体を残した。
2. 人名・地名等の固有名詞については原史料通りにしたものもある。

3. 本文中に最小限の読点（、）、並列点（・）を加えた。
4. 筆写稿本中で誤記・誤字・脱字と思われるものには原史料と照合して修正を施した。
5. 原史料の文字が破損や虫損等で判読しがたい場合は□で示した。
6. 原史料で抹消された文字が判読可能な場合は左傍に〻を付けて原文を残し、訂正の文字を右傍に記した。
7. 本文中の体裁は原則として原史料の記載通りとし、適宜本書形式に合わせた。
8. 片仮名の「ニ」および助詞の「而」等はポイントを下げて右寄せにした。

二、益冨組より平戸藩への運上史料

【史料1】

（表紙）

宝暦十二

年〻御運上油納帳

覚

一　油三千三百挺　寛延元年辰冬瀬戸浦勢美本魚弐拾九本御運上油高

一　同千六百挺　同弐年巳冬鯨数本魚拾六本

一　同五千挺　午ノ冬〻未春迄本魚四拾九本御運上油

一　同弐千三百挺　宝暦元年未ノ冬勢美本魚弐拾本・座頭六本分

一　同四千八百六拾五挺　同弐年申冬勢美本魚三拾七本・座頭六本分

一　同三千六百挺　同三年酉ノ冬勢美本魚三拾本・座頭弐本分

一　同三千三百挺　同四年戌冬勢美本魚弐拾五本・座頭拾本・長須壱本分

一　同三千五拾挺　同五年亥冬勢美本魚弐拾三本・座頭四本、酉ノ春勢美八本、尤春浦勢美ハ五拾挺之御運上油

一　同五千四百弐拾五挺　同六年子ノ冬勢美本魚三拾七本・座頭拾壱本、丑ノ春勢美弐本・座頭九本、尤座頭弐拾五本御運上

一　同弐千弐拾五挺　同七年丑ノ冬勢美本魚拾六本・座頭壱本、寅ノ春浦勢美三本・座頭七本分

一　同四千七百七拾五挺　宝暦八年寅ノ冬勢美本魚三拾七本・座頭壱本、卯春浦勢美壱本・座頭五本分

内三百挺ハ丑年焼失ニ付三本分御運上御免被仰付候処、其年不漁ニ付寅ノ年御運上之内ニ而□□置候

一　同千弐拾五挺　同九年卯冬勢美本魚五本・座頭弐本、辰ノ春浦勢美八本・小鯨子持壱最合之御運上

一　同四千五百九拾壱挺　同十年辰ノ冬勢美本魚弐拾八本・座頭弐本・勢美壱本御見分物油弐拾五挺

壱本同　油弐拾壱丁

壱本同　油弐拾五丁

壱本同　油弐拾丁

巳ノ春浦勢美弐本・座頭四本御運上

一　同五千七四拾六挺　同十一年巳冬勢美本魚三拾七本・同弐本御見分物・同壱本ハ勢美子御運上油御免、午ノ年ハ勢美壱本・座頭壱本・小鯨子持三最

合分

〆樽数五万六百弐挺

凡代四拾三匁かへ之積り

代弐千百七拾五貫八百八拾六匁

一　油七千弐百九拾五挺　宝暦十二年午ノ冬瀬戸組本魚四十七本之御運上油

三十六匁かへ

代弐百六拾弐貫五百弐拾匁

一　同三千七百八拾挺　同十三年未ノ冬勝本御運上油本魚弐拾九本分

三十七匁かへ

代百三拾九貫八百六拾匁

銀高合弐千五百七拾八貫弐百六拾六匁

樽数〆六万千六百七拾七挺　先辰年去未冬迄十六年分

一　油七千百五拾挺　未年ゟ巳ノ冬迄十一ヶ年御崎浦御運上高一ヶ年ニ油六百五十丁宛

凡四拾三匁かへ之積り

代三百七貫四百五拾目

〆

一　同千三百挺　午年未年両年分之御崎浦御運上油

三十七匁かへ

代四拾八貫百目

〆油八千四百五拾挺

代〆三百五拾五貫五百五拾目

先未年ゟ去未年迄十三年分

【史料2】

（表紙）

宝暦十三

午冬瀬戸組指引帳

未

四月　益冨又左衛門

一　銀百弐拾六貫目

但冬浦。瀬戸組鯨御運上銀納前運上銀

一　銀壱貫八百弐拾九匁

未春同所鯨御運上銀

但春浦運上銀

一　銀九百三拾六匁

但未春浦運上油弐拾五挺冬浦納り、壱丁二口〆弐拾六挺納前之油三拾六匁替ニ〆当ル銀

三口合銀百弐拾八貫七百六拾五匁納り前

内六拾貫目

先納銀指引

同弐拾八貫六百四匁

但米千六百八拾弐俵壱斗七升六合五勺渡り前壱俵拾七匁かへニ〆指引

同四貫五拾四匁
但百五拾貫目油先納三拾七匁替ニ〆取立候を三拾六匁替ニ相極候
付渡り前指引
同弐拾貫目
但下ノ関為替ニ而納り
同拾貫目
平戸納り
残六貫百七匁　納り前
未
四月十四日

一　銀百五拾貫目　瀬戸組油先納
〆銀三百貫目
一　銀三拾貫目　生属御崎組米先納
一　銀三拾貫目　同所運上先納
一　銀弐拾五貫目　同所油先納
〆銀八拾五貫目
一　銀弐拾五貫八百目
但午冬瀬戸浦ニ而取揚候鯨数四拾本之内、勢美本魚三拾本御運上六拾七貫弐百五拾目、同拾七本勢美見分物運上拾八貫五百五拾目、〆銀八拾五貫八百目之内、六拾貫目魚運上先納指引残分
一　銀三貫九百九拾五匁
同所春浦ニ而取揚候鯨数六本内、三本勢美見分物運上壱貫七百四拾五匁、同弐本長須運上壱貫五百目、同壱本座頭運上七百五拾目ニ当ル銀
一　銀弐拾七貫弐百八拾四匁
右同所冬春魚数ニ当ル御運上油四千百三拾八挺之内、百三拾挺御台所御用、同四挺同所本庄御用、同百五拾挺御家中、油三口〆弐百八拾四挺、引残三千八百五拾四挺、壱挺四拾六匁かへニ〆当ル銀百七拾七貫弐百八拾四匁之内、百五拾貫目油先納指引残分
一　銀四貫三百八拾六匁
但午冬大嶋組ニ而取揚候鯨数六本見分当ル御運上銀
一　銀四貫四百拾六匁

【史料3】
（表紙）
安永四　運上
午冬ゟ　瀬戸御崎大嶋組　指引帳
未春迄　先納
六月　御勝手方
益冨又左衛門殿

一　銀三拾貫目　午冬瀬戸浦受銀
一　銀六拾貫目　御米先納
一　銀六拾貫目　運上先納

右同所右魚数当ル御運上油九拾六挺、当ル銀壱挺四拾六匁替ニ〆

一　銀七貫七百四拾九匁

但津吉春組ニ而取揚候鯨数拾七本内、三本勢美見分物御運上銀三貫四拾八匁、同拾四本座頭見分物共運上四貫七百壱匁当ル銀

一　銀六貫八百八匁

右同所魚当ル御運上油百四拾八挺、当ル銀壱挺四拾六匁替ニ〆

一　銀弐拾弐貫九百弐拾弐匁

生属御崎組ニ而取揚候鯨数三拾四本内、八本勢美御運上拾弐貫目、同四本座頭本魚運上三貫目、挟子持一最合壱貫五百目、白子持二最合壱貫五百目、長須本魚壱本壱貫五百目、見分勢美三本九百九匁、座頭見分物壱本百弐拾九匁、長須見分物弐本三百四拾四匁、突組ニ而小鯨二最合弐貫四拾三匁当ル銀

一　銀四貫九百目

右魚当ル御運上定油六百五拾挺代壱挺四拾六匁ニ〆弐拾九貫目九百目之内、弐拾五貫目油先納指引残分

〆銀四百九拾三貫弐百六拾目

内三拾貫目　生月御崎組魚先納引

残四百六拾三貫弐百六拾目　納り前

内納り方

一　銀弐拾五貫目

午二月廿一日筑前才覚石蔵屋利左衛門方ゟ積出、上乗立石喜左衛門、立石弥五右衛門受取手形前

一　銀弐拾五貫目

午二月廿八日下ノ関才覚奈良屋初兵衛、肥後屋喜一郎ゟ積出、上乗り立石喜左衛門、立石弥五右衛門受取手形前

一　銀三拾貫目

午二月廿六日生貝屋清右衛門、尼屋市兵衛ゟ大坂納、池野段四郎、武冨館右衛門受取手形前

一　銀弐拾貫目

午二月晦日生貝屋清右衛門、尼屋市兵衛ゟ大坂納、池野団四郎、武冨館右衛門受取手形前

一　銀弐拾五貫目

午三月廿三日右両問屋ゟ大坂納、池野団四郎、武冨館右衛門受取手形前

一　銀弐拾七貫目

午六月十一日生貝屋清右衛門ゟ大坂納、池野団四郎、胡井川駒右衛門、武冨館右衛門受取手形前

一　銀三拾貫目

午七月朔日生貝屋清右衛門ゟ大坂納、右三人受取手形前

一　銀弐拾五貫目

是ハ辰七月朔日大坂証文前種子打替当テ弐拾五貫目、巳冬ゟ午春迄先納之内、前操三拾七貫目、二口〆六拾弐貫目之内、弐拾五貫目巳冬ゟ午春迄組方納銀納り相成、同弐拾五貫目此節指引納ニ成ル

〆銀弐百七貫目　大坂納

一　銀九拾八貫目

平戸納横帳前

内三貫五百目
午正月十八日ゟ木田善八為替主大嶋浦宮内与十郎大坂乗付
為替ニ而
同三貫目
午二月二日木田善八納
同三貫五百目
午二月八日右同人納
同三貫目
午二月十二日木田善八納
同壱貫目
午二月廿二日右同人納
同四貫五百目
午三月朔日右同人納
同七百目
午三月二日右同人納
同八百目
午三月廿日右同人納
同拾九貫五百九拾五匁弐分三厘
午五月十四日右同人納
同拾五貫目
午五月八日右同人納
同弐貫目
同日右同人納
同三貫目
午五月十二日右同人納
同拾貫目
午五月十二日右同人納
同拾七貫目
午五月十四日右同人納
同四貫目
午五月十四日右同人納
同七貫四百四匁七分七厘
午五月中右同人納
〆
一銀三拾五貫目
午暮組方納銀引当畳屋又右衛門ゟ御借入銀直納
一銀四拾貫目
右同断畳屋佐七、同次左衛門ゟ御借入銀直納
一銀四貫五百目
右佐七、治左衛門出銀四拾貫目之利銀直納り
一銀拾壱貫百拾五匁
午冬米先納渡不足七百四拾壱俵当ル代壱俵拾五匁かへニ〆指引直納り
一銀壱貫弐百七拾七匁五分四りん
御台所御用ていら三千五百四拾三斤代壱貫六拾弐匁九分、赤身千弐百弐斤代百八拾目三分、かふら骨四貫九百目代壱匁八分四厘、ふりく六貫五百め代三拾弐匁五分ニ而直納

一　銀九貫五百拾壱匁
　　巳冬ゟ午春迄組方指引之上納り越此節納立
〆銀四百六貫四百三匁五分四厘　　納り高
引残五拾六貫八百五拾六匁四分六厘　　納り前
右者去午冬ゟ未春迄瀬戸組、生属御崎、大嶋組御運上先納納方引合之
上指引如斯御座候以上
　　未
　　六月　　瀧野巌　之　丞㊞
　　山口喜右衛門㊞
　　益冨又左衛門殿

三、おわりに

史料1は、寛延元（一七四八）年から宝暦十三（一七六三）年までの壱岐瀬戸・勝本の両浦と、宝暦元（一七五一）年から同十三年までの生月島御崎浦における益冨組より平戸藩へ上納した莫大な運上油についての記録である。前者では十六年間、後者では十三年間にわたる長期間の平戸藩と益冨組との貢納関係を通して、近世中期における西海捕鯨業の実態を浮き彫りにする史料であると言っても過言ではない。

内訳では各年の鯨種別の捕獲数と、それによる運上油の上納額が詳しく載せられている。鯨に関しては勢美鯨、座頭鯨、長須鯨、小鯨（兒鯨）の名がみられる。この四種が西海捕鯨業地域の捕鯨対象種であった(9)。なかでも、勢美鯨は「本魚」と称された最高の鯨種であり、次に座頭鯨が「上魚」とされ、この二種が主たる捕獲鯨であった(10)。

捕獲数については、冬浦と春浦とに分けて記述している年もある。壱岐の両浦では、寛延期（一七四八～一七五〇）頃から冬浦に比べて春浦の捕獲数がはるかに少なかったことがわかる(11)。しかし、冬・春両浦を合わせた捕獲数は高く、宝暦末期の益冨組の経営は伸長した(12)。また、この史料から寛延・宝暦期の運上の定額化に関しての検討が可能である。この点は松下の研究において未解明であり(13)、本史料の重要性がみいだせる。

史料2は、宝暦十三年四月に作成された壱岐の瀬戸組の運上先納と指引内容についてである。年間の運上の内容が具体的に記されている。松下は宝暦十三年以前の運上銀について不明としたが(14)、宝暦末期の運上銀が本史料から把握できる。さらに、冬浦と春浦の運上銀とその違いが理解でき、壱岐の益冨冬組からの運上銀が平戸藩にとって肝要であったことも鮮明となる(15)。運上銀の先納方法の一つとして下関為替がみられ、平戸藩と益冨組との関係において、すでに下関は地方市場として大きな役割を果たしていた(16)。

史料3は、安永四（一七七五）年における瀬戸・御崎・大嶋組の運上先納と指引内容についてである。益冨組が、平戸藩領域の捕鯨漁場において、同時に三つの鯨組組織を運営した経営形態も捉えられる史料である(17)。史料1・2と同様に瀬戸組は壱岐の瀬戸浦で、御崎組は益冨組の本拠地である生月島で捕鯨業を展開した。大嶋組は生月島に隣接する的山大島の冬浦における益冨組を指し、史料中にみられる津吉春組は平戸島の春浦における益冨組のことであった(18)。これら各浦は図1の通りであり、近世中後期の西海捕鯨業地域のなかで平戸

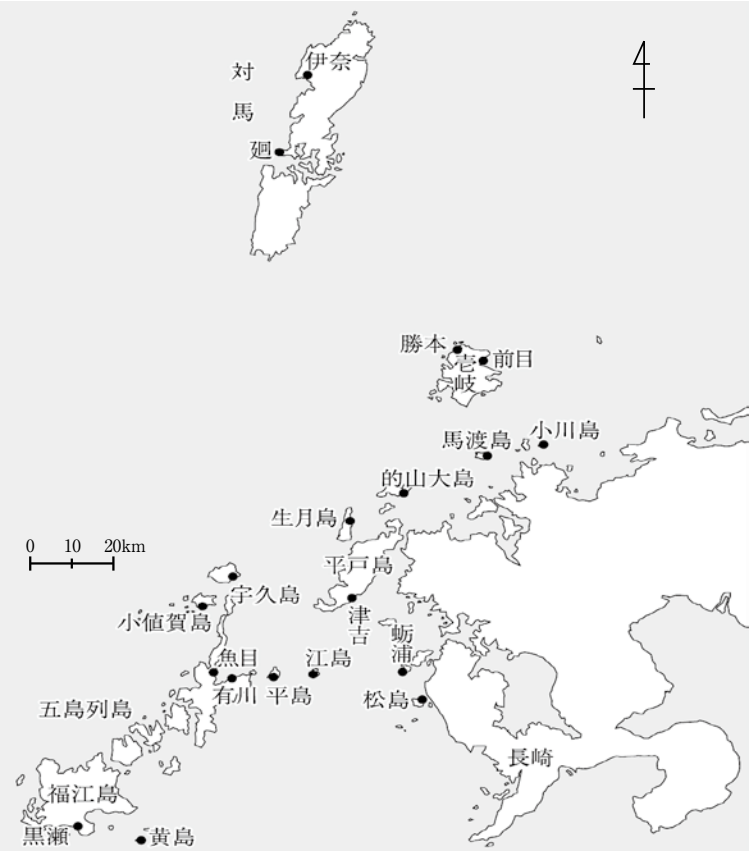

図１　近世中後期における西海地方の捕鯨漁場
出所）末田智樹『藩際捕鯨業の展開―西海捕鯨と益冨組―』御茶の水書房、2004年、6頁。

藩領域に位置する有数な捕鯨漁場であった(19)。

益冨組は、安永期において平戸藩領域における主要な捕鯨漁場を占有したことになる。一年の鯨組は冬浦＝冬組と春浦＝春組の二組で編成されたが、この史料から益冨組が冬浦から春浦へ移動し、別々の捕鯨漁場で展開したことが読みとれる(20)。拙著で明らかにしたように津吉浦が、平戸藩領域において最も高い捕獲数を有した春浦であった(21)。本史料より益冨組が平戸藩領域の屈指の捕鯨漁場を浦請で手中にし、巨大鯨組へと発展した過程の一端がうかがえる。

益冨組は生月島御崎浦から壱岐瀬戸・勝本の両浦へ、そして的山大島ならびに津吉浦に捕鯨業地域を拡大し、平戸藩領域において三組の同時経営の基盤を確立するまでに成長した(22)。御崎、壱岐、的山大島、津吉の各浦における経営展開が、この時期までの益冨組の成長度合いを端的に示すことになる。益冨組は宝暦・明和期の二組から三組へ増加した(23)。安永期の益冨組は、的山大島の井元組に代わって生月島と的山大島周辺の捕鯨漁場を獲得し、ほぼ中央に位置する御崎浦を拠点に平戸藩領域の南北の捕鯨漁場へ進出した。以後、益冨組は平戸藩領域を越えて捕鯨業活動の地域を広げ、北部の対馬藩、南部の大村・五島藩の捕鯨漁場にわたって藩際経営を確立する(24)。

勢美鯨と座頭鯨など鯨種によって運上銀の相違が汲みとれるが、本史料で着目すべき点は先納方法についてである。筑前（博多）、下関、大坂の商人といった西日本の代表的な都市商人の為替手形が大きな役目を持っていた(25)。しかも、益冨家同族の畳屋又右衛門、畳屋佐七、畳屋次（治）左衛門などから借入銀が納められ、益冨組経営に参画したことが明確になる。三名は、大別当として活躍した上席の畳屋一族であった(26)。益冨組が、宝暦・安永期に飛躍的成長を遂げた背景に平戸藩への巨額な運上と同族団経営が存在した(27)。

筆写稿本には、近世日本捕鯨業史の関連史料のなかで一級史料とされる極めて重要な益冨家文書が含まれている。今後も益冨家文書の原史料と突き合わせて翻刻を続け、近世期最大の鯨組組織であった益冨組の経営実態を解明する基礎的な資料を提供していくつもりである(28)。

注

（1）筆写稿本に関して本稿では神奈川大学日本常民文化研究所『漁業制度資料　筆写稿本』（二〇〇九年）を参照した。筆写稿本所収の益冨家文書の全体構成については次の機会に一覧化を予定している。

（2）引用・参考文献の服部一馬を参照。以下、とくに具体的に文献を示していないものは、引用・参考文献に掲げている。

（3）益冨家文書の目録は秀村選三（九州大学名誉教授）、藤本隆士（福岡大学名誉教授）を中心に作成され、現在『益冨家文書一連番号目録』（一九六五年）と『益冨家文書年代順目録』の二種類がある。これらの目録については秀村選三「近世西海捕鯨業に関する史料（一）」一～三頁、秀村選三「近世西海捕鯨業史料『前目定目写』」一～二頁を参照。

（4）本文で記した史料名に関しては、便宜上『益冨家文書年代順目録』の記入方法と一部異にした。

（5）松下志朗（以下、頁数を示していない場合は文献全体に関係しているためである）。

（6）松下志朗、一八～二二頁、秀村選三「近世西海捕鯨業における生月島益冨組の創業」五～七・一二～一六頁。

（7）藤本隆士「幕末西海捕鯨業の資金構成」。

（8）秀村選三・藤本隆士「西海捕鯨業」、秀村選三「近世西海捕鯨業における生月島益冨組の創業」以外に、益冨組（巨大鯨組への移行）の形成過程に関する検討はなかった。今後さらなる精細な分析が必要である。

（9）「勇魚取絵詞」（宮本常一・原口虎雄・谷川健一編『日本庶民生活史料集成』第十巻、三一書房、一九七〇年）二八七・三〇三～三〇四頁。

（10）前掲「勇魚取絵詞」三〇三頁、田畑久夫、末田智樹『藩際捕鯨業の展開』。

（11）田畑久夫、末田智樹『藩際捕鯨業の展開』。

（12）秀村選三「近世西海捕鯨業における生月島益冨組の創業」一四頁。

（13）松下志朗、二四～四四頁。

（14）松下志朗、二四頁。

（15）松下志朗、三〇頁、田畑久夫。

（16）藤本隆士「鯨油の流通と地方市場の形成」。

（17）『益冨家文書年代順目録』三頁を参照。

（18）末田智樹『藩際捕鯨業の展開』。

（19）田畑久夫、末田智樹『藩際捕鯨業の展開』。

（20）末田智樹『藩際捕鯨業の展開』。

（21）秀村選三・藤本隆士「西海捕鯨業」一六四頁。

（22）末田智樹『藩際捕鯨業の展開』。

（23）秀村選三・藤本隆士「西海捕鯨業」一六四頁。

（24）末田智樹『藩際捕鯨業の展開』。

（25）藤本隆士「西海捕鯨業経営と福岡藩」、藤本隆士「鯨油の流通と地方市場の形成」。

（26）藤本隆士「近世西海捕鯨業経営と同族団（一）」、藤本隆士「近世西海捕鯨業経営と同族団（二）」、末田智樹『藩際捕鯨業の展開』。

（27）秀村選三「近世西海捕鯨業における生月島益冨組の創業」一四～一六頁。

（28）秀村選三は益冨家文書のなかで特に重要な史料を数多く翻刻している。

附記

益冨家文書および益冨組の経済史・経営史研究に関しては、恩師の藤本隆士先生（福岡大学名誉教授）よりご指導を賜った。歴史地理学・民俗学的観点の重要性および壱岐の捕鯨業については恩師の田畑久夫先生（昭和女子大学大学院教授）よりご指導を賜った。伊藤康宏先生、田島佳也先生をはじめプロジェクト班の先生方からは研究会を通じて数多のご教示を頂戴した。記して深い感謝の念を表する次第である。

引用・参考文献

岩﨑義則、二〇一〇年、「捕鯨業者井元弥七左衛門と平戸藩―井元家文書の伝来とその分析―」、九州大学『史淵』第一四七輯

大村秀雄、一九六九年、『鯨を追って』岩波書店

古賀康士、二〇一〇年、「西海捕鯨業における地域と金融―幕末期壱岐・鯨組小納屋

の会計分析を中心に―」、『九州大学総合研究博物館研究報告』第八号
古賀康士、二〇一一年、「西海捕鯨業における鯨肉流通―幕末期壱岐小納屋の販売行動を中心に―」、『九州大学総合研究博物館研究報告』第九号
古賀康士、二〇一二年、「西海捕鯨業における中小鯨組の経営と組織―幕末期小値賀島大坂屋を中心に―」、『九州大学総合研究博物館研究報告』第十号
末田智樹、二〇〇四年、『藩際捕鯨業の展開―西海捕鯨と益冨組―』御茶の水書房
末田智樹、二〇〇五年、「江戸時代に存在していた国際的な捕鯨業?」、中部大学編『アリーナ』第二号
末田智樹、二〇〇八年、『近世日本捕鯨業の歴史地理学的研究―西海捕鯨業地域の形成と益冨組の藩際経営―』昭和女子大学二〇〇七年度博士論文
末田智樹、二〇〇八年、「近世西海捕鯨業史研究の現状と五島藩捕鯨業の地域性」、『立教大学日本学研究所年報』第七号
末田智樹、二〇〇九年、「近世日本における捕鯨漁場の地域的集中の形成過程―西海捕鯨業地域の特殊性の分析―」、『岡山大学経済学会雑誌』第四十巻第四号
末田智樹、二〇一〇年、「自著を語る　末田智樹『藩際捕鯨業の展開―西海捕鯨と益冨組―』御茶の水書房、二〇〇四年四月」、中部大学編『アリーナ』第八号
武野要子、一九六八年、「辺境相良藩と領外資本の関係―苧の専売化をめぐって―」、『九州文化史研究所紀要』第十三号
武野要子、一九六九年、「壱岐捕鯨業の一研究―益冨組小納屋の分析―」、『福岡大学創立三十五周年記念論文集　商学編』
武野要子、一九七九年、「前目勝本鯨組永続鑑」、福岡大学『商学論叢』第二十四巻第一号
田畑久夫、一九八七年、「西海捕鯨業の変遷―壱岐島を事例として―」、『民俗と歴史』第十九号
鳥巣京一、一九九三年、『西海捕鯨業史の研究』九州大学出版会
鳥巣京一、一九九九年、『西海捕鯨の史的研究』九州大学出版会
鳥巣京一、一九九九年、「江戸後期蝦夷地における捕鯨開拓」、福岡大学『商学論叢』第四十三巻第三号
中倉光慶、一九八三年、「西海捕鯨と井元弥七左衛門家について―北松浦郡大島村―」、『松浦党研究』第六号
中園成生、二〇〇一年、『くじら取りの系譜―概説日本捕鯨史―』長崎新聞社
中園成生、二〇〇六年、『改訂版くじら取りの系譜―概説日本捕鯨史―』長崎新聞社
中園成生・安永浩、二〇〇九年、『鯨取り絵物語』弦書房
服部一馬、一九五三年、「幕末期蝦夷地における捕鯨業の企図について」、『横浜大学論叢』第五巻第二号
秀村選三・藤本隆士、一九七六年、「西海捕鯨業」、『江戸時代図誌　西海道一』第二十二巻、筑摩書房
秀村選三、一九五二年、「徳川期九州に於ける捕鯨業の労働関係（一）」、九州大学『経済学研究』第十八巻第一号
秀村選三、一九五二年、「徳川期九州に於ける捕鯨業の労働関係（二）」、九州大学『経済学研究』第十八巻第二号
秀村選三、一九九六年、「近世西海捕鯨業に関する史料（一）―肥前国生月島益冨家『所々組方永代記』―」、久留米大学『産業経済研究』第三十六巻第四号
秀村選三、一九九六年、「近世西海捕鯨業に関する史料（二）―肥前国生月島益冨家『番永代記』―」、久留米大学『産業経済研究』第三十七巻第一号
秀村選三、一九九六年、「近世西海捕鯨業に関する史料（三）―肥前国生月島益冨家『番永代記』―」、久留米大学『産業経済研究』第三十七巻第二号
秀村選三、一九九六年、「近世西海捕鯨史料『五島黒瀬組定』―肥前国生月島益冨組文書より―」、久留米大学『比較文化研究』第十八輯
秀村選三、一九九七年、「近世西海捕鯨業における生月島益冨組の創業」、久留米大学『比較文化研究』第十九輯
秀村選三、一九九七年、「近世西海捕鯨業史料『前目定目写』―肥前国生月島益冨組文書より―」、久留米大学『産業経済研究』第三十八巻第一号
秀村選三、一九九七年、「幕末西海捕鯨業における益冨組の労働組織の一史料」、久留米大学『産業経済研究』第三十八巻第三号
福本和夫、一九七八年、『日本捕鯨史話―鯨組マニュファクチュアの史的考察を中心

に―（新装版）』法政大学出版局
藤本隆士、一九六四年、「幕末西海捕鯨業の資金構成―生月島益冨家の場合―」、『福岡大学創立三十周年記念論文集　商学編』
藤本隆士、一九六七年、「西海捕鯨業経営と福岡藩―地方市場の一考察―」、宮本又次編『商品流通の史的研究』ミネルヴァ書房
藤本隆士、一九六七年、「鯨油の流通と地方市場の形成」、『九州文化史研究所紀要』第十二号
藤本隆士、一九七二年、「近世西南地域における銀銭勘定」、福岡大学『商学論叢』第十七巻第一号
藤本隆士、一九七五年、「近世西海捕鯨業経営と同族団（一）」、福岡大学『商学論叢』第十九巻第四号
藤本隆士、一九七五年、「近世西海捕鯨業経営と同族団（二）」、福岡大学『商学論叢』第二十巻第一号
藤本隆士、一九七六年、「益冨又左衛門」、『豪商百人（別冊太陽）』平凡社
藤本隆士、一九七八年、「近世西海捕鯨業史の研究―平戸藩生月島益冨組を中心として―」、九州大学『経済学研究』第四十四巻第二・三号
藤本隆士、一九七九年、「捕鯨図誌『勇魚取絵詞』考」、福岡大学『商学論叢』第二十四巻第二・三号
藤本隆士、一九八一年、「西海捕鯨と鯨油の流通」、『日本農書全集』第三十一巻月報
藤本隆士、一九八三年、「福岡藩と藩際経済―博多相物問屋をめぐって―」、『福岡県史　近世研究編　福岡藩（二）』福岡県
藤本隆士編、一九八四年、「有川鯨組式法定（一）」、福岡大学『商学論叢』第二十八巻第四号
藤本隆士編、一九八四年、「有川鯨組式法定（二）」、福岡大学『商学論叢』第二十九巻第一号
藤本隆士、一九九一年、「徳川期における小額貨幣―銭貨と藩札を中心に―」、『社会経済史学』第五十七巻第二号
藤本隆士編、一九九四年、『近世西海捕鯨業史料―山縣家文書―』、福岡大学総合研究所
松下志朗、一九六九年、「西海捕鯨業における運上銀について―平戸藩領生月島益冨組を中心に―」、『福岡大学創立三十五周年記念論文集　人文編』
森弘子・宮崎克則、二〇一〇年、「天保三年『勇魚取絵詞』版行の背景」、『九州大学総合研究博物館研究報告』第八号
森弘子・宮崎克則、二〇一二年、「大槻清準『鯨史稿』と大槻玄沢『鯨漁叢話』の関係性」、『九州大学総合研究博物館研究報告』第十号
森弘子・宮崎克則、二〇一二年、「西海捕鯨絵巻の特徴―紀州地方の捕鯨絵巻との比較から―」、西南学院大学『国際文化論集』第二十六巻第二号
森田勝昭、一九九四年、『鯨と捕鯨の文化史』名古屋大学出版会
＊参考文献には益冨組に関する研究を中心に掲げ、史資料、自治体史、図録類などは省いた。